甦る編集者エミリー・ディキンスン

――ファシクル５――

中　井　紀　明

詩人エミリー・ディキンスン（1830-86）は生前ほとんど無名で，死後1800篇近い詩が親族によって発見された。これらの中に40のファシクル（「束」,「詩集」の意味）と後に言われる形のものが残されている。私は今までファシクルを１から順番に取り上げて詩人自身の編集の跡を辿ってきた。本稿では５番目のファシクルにも詩人自身の「編集」の跡が見られるか検討を加える。短い抒情詩を連ねることで個の詩を超えるより大きな物語を展開しようとしていることを示したい。

本稿ではファシクル５自体をフランクリン版（Franklin, R. W. ed., *The Poems of Emily Dickinson,* Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1998）に点在している詩群を長々と集約していくが，これはファシクル１から40に所属する詩群をすべて一箇所に集約し活字化した『エミリー・ディキンスン詩集』が英語にもないからである。たとえば本稿のファシクル５だけを絶海の孤島にもって行きひたすらそれを詩集として楽しむということはできないようになっている。ジョンソン版（Johnson, Thomas H. ed., *The Poems of Emily Dickinson,* Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1955）もフランクリン版もディキンスンの意図した文脈でディキンスンの詩群を提供しているわけで

＊本学国際教養学部
キーワード：夏，生，死，夜，神

はない。写真版で原稿そのものを提供しているもの（(Franklin, R. W. ed., *The Manuscript Books of Emily Dickinson,* Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1980）はあるが，活字で読めるものがいまだ出版されず，詩人が与えた文脈の下で詩人の残したテクスト体験ができないということはディキンスン研究の大きな障害である。（数字について説明する。1 66（110）で1はファシクル内の順番，66はジョンソン版で割り当てられた番号，（110）はフランクリン版での番号）私は以下のいわば『エミリー・ディキンスン詩集５』をこの一ヶ月持ち歩き詩集として読んでみた。以下はその検証の結果である。

Fascicle 5

1 66（110）
So from the mould
Scarlet and Gold
Many a Bulb will rise—
Hidden away, cunningly,
From sagacious eyes.

So from Cocoon
Many a Worm
Leap so Highland gay,
Peasants like me—
Peasants like Thee
Gaze perplexedly!

（「生）の誕生）ファシクル５は「生」の誕生で始まる。第一連も第二連も地中と繭の違いがあるけれども「生」が誕生している。注目すべきは第一連の地中に埋もれている球根からの花の命の誕生である。後に登場してくる埋葬されている死者たちと違って，球根は生命として地中から蘇る。

2 110（111）

Artists wrestled here!

Lo, a tint Cashmere!

Lo, a Rose!

Student of the Year!

For the Easel here

Say Repose!

（夏の盛りの美しい自然の中で繰り広げられる「生」の輝きはは画家たちでもその色合いをうまく捉えきれないほどである。）「Student of the Year」賞をもらえるほどの努力をした画家にイーゼルを休めるようねぎらいの言葉を詩人はかける。

3 67（112）

Success is counted sweetest

By those who ne'er succeed.

To comprehend a nectar

Requires sorest need.

Not one of all the purple Host

Who took the Flag today

Can tell the definition
So clear of Victory

As he defeated— dying—
On whose forbidden ear
The distant strains of triumph
Burst agonized and clear!

（敗北と「死」という枠組みが成功，勝利といった「生」の極みをもっともよく捉えるという「生」の逆説）「生」は往々にして戦いだ。そして勝者と敗者がいやおうなく出現する。「勝利」と「成功」は敗れて「死」に向かっている人間がもっとも切実に味わうというのが「生」の逆説である。1，2そして次の4とこのファシクル最初の詩群でこのファシクルの舞台（生命が満ち溢れる夏）が設定される。しかしこの舞台に忍び込んできている「死」の翳りがこのファシクルに散りばめられている。その最初のものがこの詩における「死」につつある敗者への言及である。

4 111（113）
The Bee is not afraid of me.
I know the Butterfly—
The pretty people in the Woods
Receive me cordially－

The Brooks laugh louder
when I come—
The Breezes madder play;

Wherefore mine eye thy silver mists,
Wherefore, Oh Summer's Day?

夏の「生」の描写である。すべてが夏の盛りである。太陽は「生」の源であり象徴だが，いたずらか意地悪か知らないけれど，それが照らすものがあまりにもまぶしすぎて（“thy silver”）「私」の目を見えにくくしている（“mists”）。陽の強さで夏の満ち溢れる「生」の営みが見えにくくなるほどだというのである。このようにして最初の4篇で詩人は「生」を夏という舞台に設定する。

5 112（114）
Where bells no more affright the morn—
Where scrabble never comes—
Where very nimble Gentlemen
Are forced to keep their rooms—

Where tired Children placid sleep
Thro' centuries of noon
This place is Bliss—this town is Heaven—
Please, Pater, pretty soon!

“Oh could we climb where Moses stood,
And view the Landscape o'er”
Not Father's bells—nor Factories,
Could scare us any more!

（墓場で眠る死者たち）1から4までの流れから一転して，「生」の盛りの夏とは対照的な存在（墓場）に読者は導かれる。死者たちはここで「“sleep”」している。しかしここでの眠りを朝の太陽（の光）とか「“bells”」や工場の音など「生」の音が中断することはない。これは普通の眠りとは違って，「永遠の眠り」なのである。ここには「“scrabble”」は一切なく，読者はかえってこの世の「“scrabble”」も「生」の一つのありようだと思い知らされる。

6 68（115）

Ambition cannot find him.
Affection doesn't know
How many leagues of nowhere
Lie between them now!

Yesterday, undistinguished!
Eminent Today
For our mutual honor,
Immortality!

この詩も「死」を扱っている。一行目の「彼」は「死」んだのだ。

7 113（116）

Our share of night to bear—
Our share of morning—
Our blank in bliss to fill
Our blank in scorning—

Here a star, and there a star,
Some lose their way!
Here a mist—and there a mist—
Afterwards—Day!

前述したように太陽は「生」の象徴である。太陽の出ない「夜」というのは耐えなければならない時，道に迷いがちな暗闇である。何よりも地中の墓の暗闇と同じである。太陽ではなく星あかりの下で暗闇に対抗しようとして道に迷うものも出てくる。できたら夜などなくてもよい。ずっと朝，昼であってもよい。しかし現実には毎日「夜」が来，人間は「眠る」。夜は「死」の暗黒と同じであり，「眠り」は「永遠の眠り」（5，17）につながりかねないものなのだ。あちこちでもやも出る。太陽が出てくる朝が待ち望まれる。「朝」は毎日のこの恐ろしい擬似「死」（「夜」）を耐えた（“bear”）褒美（“share”）である。

8 114（97）
“Good night,” because we must!
How intricate the Dust!
I would *go* to know—
Oh Incognito!

Saucy, saucy Seraph,
To elude me so!
Father! they wont tell me!
Wont you tell them to?

依然として墓場の中で，夜と「死」が結び付けられている。「死」がどんなものであるのか知るために「死」のところに赴けといわれるなら行くと言いながら，冒頭で「お休みなさい，「私」たちは帰らなければ」とお別れをしている。第二連は「死」の背後にいる神に，天使が「死」の秘密，真実を語ってくれないと直訴している。

9 86(98)

South winds jostle them—
Bumblebees come—
Hover—hesitate—
Drink, and are gone—

Butterflies pause
On their passage Cashmere—
I—softly plucking,
Present them here!

一行目の “them” は花であろう。友人に花を贈るという行為の中で花に添えられた「手紙」の役割を果たした詩である。この詩自体が詩人自身の「生」の営みだ。この詩でファシクルの流れはまた「生」に戻っている。

10 69(99)

Low at my problem bending,
Another problem comes—
Larger than mine—serener—
Involving statelier sums.

I check my busy pencil—
My figures file away—
Wherefore, my baffled fingers
Thy perplexity?

「生」の複雑さの中で次々に襲ってくる「生」の難問群。

11 115(100)
What Inn is this
Where for the night
Peculiar Traveller comes?
Who is the Landlord?
Where the maids?
Behold, what curious rooms!
No ruddy fires on the hearth—
No brimming tankards flow.
Necromancer! Landlord!
Who are these below?

墓場の中での「暗闇」と「死」の結びつきが再び出てきている。この点は後で詳述するけれども，このファシクルで注目すべきは「死」への関心がせいぜい墓場までだということである。われわれは詩人が想像力を駆使して多くの詩の中で「死」に深く入り込んでいくことを知っているが，「死」への探検はまだ「初期」の段階として抑え気味にこのファシクルで取り上げられているのかもしれない。

12 116(101)

I had some things that I called mine—
And God, that he called his,
Till recently a rival claim
Disturbed these amities.

The property, my garden,
Which having sown with care—
He claims the pretty acre—
And sends a Bailiff there.

The station of the parties
Forbids publicity,
But Justice is sublimer
Than Arms, or pedigree.

I'll institute an "Action"—
I'll vindicate the law—
Jove! Choose your counsel—
I retain "Shaw"!

人間の「生」にあからさまに干渉してくる神が登場し,「私」もまたその干渉と果敢に戦う姿勢を示している。ここでは神は信仰の対象ではなく土地争いの相手だ。人間の「生」は往々にして争いだということがこのファシクルで語られるが（2, 3, 5, 14, 25），神も人間の「生」の争いの中の相手の一人になっている。（なお最後の "Shaw" は詩人自身の使用人

の名前である。伝記上の事実の詩の中への挿入がどの程度見られその意義と効果はファシクル全体の詩人の編集程度を見るのにどう絡んでくるのかは今後いつも視野に入れておきたい。)

13 117(102)

In rags mysterious as these
The shining Courtiers go—
Vailing the purple, and the plumes—
Vailing the ermine so.

Smiling, as they request an alms
At some imposing door—
Smiling when we walk barefoot
Opon their golden floor!

「宮廷人」というのは，神から派遣された“Bailiff”(12)のように同じく神から派遣された高貴な人たちなのか。人間の「生」の中に偽装して存在している神ということか。

14 118(103)

My friend attacks my friend!
Oh Battle picturesque!
Then I turn Soldier too,
And he turns Satirist!
How martial is this place!
Had I a mighty gun

I think I'd shoot the human race
And then to glory run!

葛藤とか争いが地上の「生」の実態だといっている。

15 70(117)
"Arcturus" is his other name—
I'd rather call him "Star"!
It's very mean of Science
To go and interfere!

I slew a worm the other day,
A "Savan" passing by
Murmured "Resurgam"—"Centipede"!
"Oh Lord, how frail are we"!

I pull a flower from the woods—
A monster with a glass
Computes the stamens in a breath—
And has her in a "Class"!

Whereas I took the Butterfly
Aforetime in my hat,
He sits erect in "Cabinets"—
The Clover bells forgot!

What once was “Heaven”
Is “Zenith” now!
Where I proposed to go
When Time’s brief masquerade was done
Is mapped, and charted too!

What if the “poles” should frisk about
And stand opon their heads!
I hope I’m ready for “the worst”—
Whatever prank betides!

Perhaps the “Kingdom of Heaven’s” changed,
I hope the “Children” there
Wont be “new fashioned” when I come—
And laugh at me—and stare!

I hope the Father in the skies
Will lift his little girl—
”Old fashioned”! naughty! everything!
Over the stile of “Pearl”!

（科学者は死んだものを分類するが，死んだ後の「私」は天の父によってどう分類されるのか。）科学者・学者たちは「物」を命名，分類する。ここで「私」によって例に挙げられているのは星，天国，「私」が殺した虫，「私」が摘んだ花，「私」が捕らえた蝶。次々にこれらは命名・分類されている。かつて “Heaven” と呼ばれた所はいま “Zenith” と呼ばれている。

「私」が「生」を失って「物」になるとき，この天国の父は「私」をどう受け取りどう「分類」するのか。

16 119(118)

Talk with prudence to a Beggar
Of "Potosi," and the mines!
Reverently, to the Hungry
Of your viands, and your wines!

Cautious, hint to any Captive
You have passed enfranchised feet!
Anecdotes of air, in Dungeons
Have sometimes proved deadly sweet!

「生」の中で「生」の恩恵を享受できずにいる人たち，そして牢獄の中で囚われの身の人たちの「生」の質で問題なのは欠乏とか自由だ。(彼らは我々がこのファシクルの 5, 6, 8, 11 ですでに出会っている墓の中の死者たちに似ている。5 では "Where very nimble Gentlemen/Are *forced* to keep their rooms－[斜体は私の指示] とある。)

17 120(119)

If this is "fading"
Oh let me immediately "fade"!
If this is "dying"
Bury—me, in such a shroud of red!
If this is "sleep,"

On such a night
How proud to shut the eye!
Good Evening, gentle Fellow men!
Peacock presumes to die!

時に「眠り」と区別できない「死」に魅惑されている「孔雀」とは「私」だろうか。「生」の中にいながら「私」は[5], [6], [8], [14]で「死」に魅せられている。

[18]121(120)
As Watchers hang opon the East—
As Beggars revel at a feast
By savory fancy spread—
As Brooks in Deserts, babble sweet
On Ear too far for the delight—
Heaven beguiles the tired.

As that same Watcher when the East
Opens the lid of Amethyst
And lets the morning go—
That Beggar, when an honored Guest—
Those thirsty lips to flagons pressed—
Heaven to us, if true.

(キリスト教徒の思い描く「天国」否定の詩)

第一連から読んでいこう。冒頭の“As”であるが，最後の“Heaven

beguiles the tired” とどうしてもうまくつながらない。二番目，三番目の “As” は欺く側と欺かれる側とがきちんと照応するので最後の行ときちんとつながる。欺く側は “fancy”，“Brooks”，“Heaven”，欺かれる側は “Beggars”，“Ear”，“the tired” だ。しかし一行目は何が何を欺くのか分からない。第二連の最初で期待通り朝は解き放されているからだ。そもそも一連の最後の行は天国が疲れた人たちに対して何を欺くといっているのだろうか。疲れていない人は欺かれることはないということなのか。天国というのは「生」に疲れた人たちだけに関係することなのか。（5 では（“tired Children”）が静かに墓の中で眠っている。）

第二連も冒頭の “As that same Watcher” がわかりにくい。これは「主文」“That Beggar pressed those thirsty lips to flagons, when an honored Guest”（わかりやすく書き直している）につながるのであろうが，彼（“that same Watcher”）は「乞食」がするようなことはしていないからだ。“the lid” を “Opens” するのは彼ではなく “the East” である。

“Beggar” が本当に “an honored Guest” ならば “flagons” も「本当」なのだろうが，“Beggar” が “an honored Guest” になるという前提そのものがそもそも疑わしい。

だから “flagons” は “Heaven” にはならない。そもそもそのようなものが天国だというのはキリスト教徒の考えている天国とはかけ離れすぎている。むしろキリスト教徒の天国観を茶化しているといったほうが正確だ。

19 84（121）

Her breast is fit for pearls,
But I was not a “Diver.”
Her brow is fit for thrones—
But I had not a crest.

Her heart is fit for rest—
I—a sparrow—build there
Sweet of twigs and twine
My perennial nest.

（これも愛とか友情という気持ちを伝えようとしている詩人自身の言語行為であり，「生」の一つの形である。

20 122（104）
A something in a summer's Day
As slow her flambeaux burn away
Which solemnizes me.

A something in a summer's noon—
A depth—an Azure—a perfume—
Transcending extasy.

And still within a summer's night
A something so transporting bright
I clap my hands to see—

Then vail my too inspecting face
Lest such a subtle—shimmering grace
Flutter too far for me—

The wizard fingers never rest—

The purple brook within the breast
Still chafes it's narrow bed—

Still rears the East her amber Flag—
Guides still the sun along the Crag
His Caravan of Red—

So looking on—the night—the morn
Conclude the wonder gay—
And I meet, coming thro' the dews
Another summer's Day!

（「死」のかげりが微塵もない夏の「日」が「生」のエネルギーを味わうように謳歌するのを詩人は辿っていく。さらに新たな夏の日が続いていく喜び。）この詩はこのファシクルの重要な語を散りばめた重要な詩である。“flambeaux” というのは夏の日のエネルギーの源のようなものであろうか。それを費やしながら夏の一日がゆっくりと過ぎていく。太陽の光から得た原資に地上のものを加えゆっくりと夏の日を進ませていく “something” が「私」に夏の日に対して畏敬の念を持たせるというのである。暗闇の夜にさえ夏にはうっとりするような，輝く何かがある。魔法のような指は休むことがない。この詩ですばらしいところは擬人法でおびただしい動詞を散りばめて夏の日の「生」の息遣いを読者に伝える迫力である。“A something in a summer's Day” が “*burn* [*s*] away” し “*solemnizes*” する。“A something in a summer's noon” つまり “A depth—an Azure—a perfume” が *“transcend* [*s*] ” する。“such a subtle, shimmering grace *flutter* [*s*] too far.” “The wizard fingers never *rest*.” “The purple brook within the breast still

chafes it's narrow bed." "The East *rears* her amber Flag." "The sun *guides* his Caravan of Red along the Crag." "the morn" が "*looks*" し "*concludes*" する。"another summer's Day" が "comes" する。このような動詞群で詩人は「生」があふれる夏をこのファシクルではもっとも執拗に描ききっている。忍び寄る「死」の翳りを帯びることのないこの一日の中に生の旺盛さを見出して喜んでいる詩人がここにいる。

21 71(105)

A throe opon the features—
A hurry in the breath—
An extasy of parting
Denominated "Death"—

An anguish at the mention
Which when to patience grown—
I've known permission given
To rejoin it's own.

「死」への最終接近。まもなく「死」ぬというときのことを想像している詩である。

22 72(106)

Glowing is her Bonnet—
Glowing is her Cheek—
Glowing is her Kirtle—
Yet she cannot speak.

Better as the Daisy
From the summer hill
Vanish unrecorded
Save by tearful rill—

Save by loving sunrise
Looking for her face.
Save by feet unnumbered
Pausing at the place.

（咲き誇っている雛菊もひっそりと「死」んでいく。ささやかなそして人知れず消えていく「生」。）

23 123（107）
Many cross the Rhine
In this cup of mine.
Sip old Frankfort air
From my brown Cigar.

（ささやかな「生」の喜び。）前半はライン川近くで産出されたワインを飲むことだろうか。後半は葉巻から産地のことを思ってほしいと詩人が読者に「生」の「喜び」を提供している。いずれにしてもこのファシクルでは「死」とか「天国」に読者を導きすぎたと感じた詩人がこの地上の異国の地にここと次の詩で読者を案内している。

24 124(108)

In lands I never saw—they say
Immortal Alps look down—
Whose Bonnets touch the firmament—
Whose sandals touch the town;

Meek at whose everlasting feet
A myriad Daisy play—
Which, Sir, are you, and which am *I*—
Opon an August day?

真夏にアルプスのふもとで咲き誇ることで「生」を享受している「私」たち雛菊)(雛菊は墓によく咲いている花でもある。)

25 125(109)

For each extatic instant
We must an anguish pay
In keen and quivering ration
To the extasy—

For each beloved hour
Sharp pittances of Years—
Bitter contested farthings—
And Coffers heaped with tears!

「生」の恍惚を得るためには大きな代価を支払わなければならないという

のが「生」の定めだという。

以上読んできた詩群を整理してこのファシクル全体が編集者ディキンスンによって制御されているということをまとめてみよう。

詩人はこのファシクルでは「生」と「死」の混在する世界を描こうとしている。「生」は[1]，[2]，[3]，[4]，[7]，[9]，[10]，[14]，[16]，[19]，[20]，[23]，[24]，[25]の詩群の中で，「死」は[5]，[6]，[8]，[11]，[17]，[21]，[22]の詩群の中で描かれている。神・天国にからむ詩群（[12]，[13]，[15]，[18]）は「生」と「死」の中間にある。このファシクルの「舞台」は生命が満ち溢れる夏である。テーマは「生」の満ち溢れた夏，そしてそこに忍び込んでいる「死」によってもたらされる翳りである。このように見てくるとこのファシクルは，地上における「生」，「死」，そして「死」を後押しする神の存在がこのファシクルの基本構造を作り上げていることが分かる。

このファシクルでは “Night”（[7]，[8]，[11]，[17]），“Morning”（[5]，[7]，[18]，[20]），“Day”（[4]，[7]，[20]）いった語がキーワードになって，詩群を連結してさまざまな意味とか効果，そしてファシクル全体のテーマを増幅している。混在ずる「生」と「死」，あるいは何か二つ以上のテーマを対比し，それをキーワードで増幅・補強するというのが，すべてのファシクルの構成原理だといえるのか。以降の私のファシクル研究はこれを「仮説」として検討することを一つの起点としていく。

「死」について最後にまとめる。「死」の中に入り込んで「死」を出し抜く詩を書いているディキンスンを我々は知っているが，このファシクルではそのような「死」への「探険」はまだ行われていない。外から興味津々と墓場を覗き見る段階である（[5]，[6]，[11]）。生の中の「死」のかげりは描かれているが，偏在する「死」への恐怖というところまでは行っていない。それどころか人間の側の問題，例えば人間間の争いのゆえに天に昇ること

を自らの意思で考える人もいる（14）。17では「死」に魅惑される人が登場している。「死」のところに行けと言われるなら行くという人もいる（18）。「死」について天使が教えてくれないので神に直訴すると息巻く輩も登場している（8）。「死」に脅威を感じない登場人物たちがこのファシクルには出ている。土地の所有権を主張する神は出てくるが（12），人間の生死にかかわって人間の所有権をあからさまに主張する神はまだ登場していない。「死」の描き方はまだ「初期」の段階ではないか。つまりすべてのファシクルに偏在するように見える「死」は，その扱いにおいて各ファシクルで差別化されているのではないか。これからのファシクルにおいて「死」がどう扱われるのか大きな興味を読者に引き起こすような扱いがこのファシクルでは行われているように私には思われる。

Emily Dickinson as Conscious Editor of Fascicle 5

Noriaki NAKAI

Emily Dickinson, editing the fascicles, arranges the poems in Fascicle 5 around the two opposites in our existence, life and death. Its stage is summer, and its main "characters" are Life and Death.

The most persuasive and climactic "life" poem is the twentieth poem with its numerous verbs in personification; they vibrate with the vitality of life in summer.

The most noteworthy of the "death" poems is their controlled portrayal, which is persistently presented from the outside (see the fifth, the sixth, and the eleventh poems). We know that the poet Dickinson explores and outwits death in many of her later poems, but the death poems in this fascicle are at their earliest stage. There is no fear of death evident in them. There is only "I", one who is fascinated by death (in the seventeenth poem), who is willing to "shoot the human race" to acquire "glory" in Heaven (in the fourteenth poem), or to visit Heaven experimentally to learn about it (in the eighteenth poem), or who complains to God of seraphs who would not reveal the truth that dispels the mystery of death (in the eighth poem).

Portrayal of the two opposites on this earth, life and death, is done so distinctly in this fascicle as to foreshadow their further discriminating exploration in the subsequent fascicles.